

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「ねそけて、ねまって、ながまって」

寝る子は育つといいますが、あんげことにこんげこと、アタマもココロもカラダもいっぺこと使う大人こそぐっすり寝ることが重要です。とはいえ、たまにはよっぴて起きて歌ってしゃべって、飲んで食べて、読んで書いて人生の業務に精出すことも大人の特権かと思えます。

さて新潟弁では、このよっぴってする夜明かしや、濃いお茶やコーヒーのせいで寝そびれてしまうことを「ねそける」といいます。筆者も以前このねそけるを共通語だと思って連発して、周囲から「??」と言う顔をされたことがありました。

たまたま居合わせた秋田出身者が「ねそけるってば、秋田弁だべな、寝そびれっことさ」と通訳？してくれたのですが、これが新潟と秋田のことばと知ってのけぞりました。お隣山形では一部でしか使われず、新潟・秋田両県で飛び石的に使われているようです。方言も共通語も日本語の中には美しい響きのあることばがたくさんありますが、この「ねそける」は、「寝そびれる」よりも語感が古風で美しく、なおかつ寝付けないうらだちと次第に白々と夜が明けるさまが伝わってくるように思います。

ねそけて眠りの浅いまま迎えた朝は、目を開けてもまだ夢うつつ。そんなときは「二番寝入り」に陥ります。共通語では「二度寝」と直球表現ですが、「二番寝入り」とくれば、ためらいと心地よさ、しかしすぐさま「あきゃ！」と後悔の念もしきりの感じで奥ゆかしく自虐的な県民気質が感じられます。寝てはいかん、寝てはいかんと思いつつ、もう少しだけね…とまたうとうとしてしまう背徳の快はやめられません。

二番寝入りで起きた直後は、まだどことなくうすらぼんやりしています。そんなときの、「さあ、ここへねまりなせ」の一言は、やれありがたや。早速

「ではお言葉に甘えて、失礼…」とごろり横になったとしたら、こりゃおおごと！「おや、どーいん！行儀わーり人らね」と思われるので注意が必要です。新潟とこれまた秋田では、「ねまる」は寝るのではなく、座ることを指すのです。もっとも古語では、黙って座るという意味で使われていたようで、新潟と秋田に古いことばが残ったという解釈もできます。「めんどなこと言わねで、まず、ここさきて、ねまれ」と土地のことばで言われたら、その響きと温もりにほっこり、にっこり、遠慮は無用、私素直にねまります。

県内では柏崎に、全国でも珍しいとされる座った形の「ねまり地藏」と一般的な地藏さんの「立ち地藏」がありますが、民謡「三階節」の原型には「ねまり地藏や立ち地藏、……」という歌詞がみられ、このことばが古くから使われてきたことが分かります。なお県内では、ねまるはストレートに「寝ること」を意味する所と場合もあり、ねまり地藏を「ねむり地藏」だと思っている人もいます（私でした）。

座る姿勢が「ねまる」なら、実際横になって休むことは「ながまる」です。こちらはいかにものびのびとしたさま、手足のばして、「じよんのび」している姿勢です。

ああ書いているだけで、ねまって、ながまりたくなってきました。ねそけて、ねまって、ながまって、たまにはじよんのび・らっくり過ごしましょ。

